

# 妙安寺だより 308号

## 暦の話 ④ 彼岸

〔お彼岸のいわれ〕

春分の日と秋分の日のお中日をはさんで、前後七日間を「お彼岸」といいます。

「彼岸」とは、梵語の「波羅蜜（パーラミター）の訳から出た言葉で、「到彼岸（とうひがん）」、彼岸に到（いた）るという意味です。この世の中の悩みと不安がつきまとう「此岸（しがん）」から、心が平安な悟りの世界である「彼岸」に到る・渡ることをいいます。

この彼岸に到る修行法を「六波羅蜜（ろくはらみつ）」といっています。

①布施（ふせ）＝思いやりの心、奉仕する生活。 ②持戒（じかい）＝決まりを守る、生活を正す。

③忍辱（にんにく）＝苦しみに耐え、正しい道を開く。 ④精進（しょうじん）＝たゆまぬ努力、続ける心。

⑤禅定（ぜんじょう）＝心静かな落ち着き、集中する心。 ⑥智慧（ちえ）＝仏道に目覚め、正しい教えを学ぶ。

この六つの修行法（仏道修行）を実践してゆくことにより、迷いの「此岸」から、悟りの「彼岸」へと到ることができるのです。

お彼岸の一週間は、仏さまが示された、この六つの修行法を実践し、日頃、忘れかけていた仏さまの心を、再確認する一週間でもあります。

〔おはぎとぼた餅〕

春のお彼岸には「ぼた餅」、秋のお彼岸が「おはぎ」で、どちらも季節の花、牡丹と萩に見立てたものといわれています。ご飯は、お粥でもなく、普通のご飯でもない中くらいのものを半搗き（はんつき）にして、手で餅のように丸め

アンやキナコやゴマなどをつけて、お中日にお供えいたします。

これは、柔らかくもなく、固くもないご飯を炊くということは、右にも左にも片寄らない（中道＝ちゅうどうといっています）、お彼岸の精神が生かされているのです。

また、どちらも小豆を使って、必ず赤い色をさせます。これは、赤色が白と同じように、呪術的に魔よけの力があるとされているからです。

〔彼岸団子〕

お彼岸のもう一つの食べ物は彼岸団子です。

これは米を粉にして、こねて丸めたもので、奈良・平安時代に中国から伝えられた唐菓子的一种です。

チョウジ・コショウ・桂心・ビャクダン・ヒハツ・ニッケイ・ササジンコウ・カンゾウ・ショウガ・カキ・塩・砂糖の十二種類を米粉と小豆アンに混ぜて丸め、油で煮たものです。

この十二種類を使うのは、仏教的な意味からで、十二縁起をあらわしています。

お彼岸は、お寺参りやお墓参りをして、先祖の霊を供養することが、仏道修行の第一歩といえるのです。

## 三月の行事案内

3月24日(水) 午後1時より

春季お彼岸お施餓鬼法要

午後2時 法話

\*正午より、オトキの供養 **ソトバ供養は、早めにお申し込みください**

なお、3月18日(木)と3月21日(日) 午前11時より お彼岸読誦回向

※御自由にお参りください。ご先祖様の供養と皆様方家族の平安を祈り、ご一緒にお経をお唱えしましょう。

お経の本は、お寺にて準備しております。(15～6人分)

